

19世紀フランスにおける日本学の進展

— 日本語文法書の発達を中心にして —

飯 田 史 也

Progress of the Japanese Studies in France of the 19th Century — The Development of the Language Text Books —

This paper attempted to clarify the progress of the Japanese studies in France of the 19th century, especially about Japanese grammar books. For this purpose I attempted to analyze two Japanese grammar books, in France of the 19th century. The contents of this paper are as follows;

- I. Prologue
- II. The books on Japan written by Léon de Rosny
- III. Rosny's criticism on preceding Japanese grammar books
- IV. The opinions of Rodriguez and Rosny about Japanese sentence styles
- V. Comparisons of the two explanations about Japanese verb conjugation
- VI. Epilogue

I. 研究意図

19世紀中～後期のフランスでは、日本研究の学問が誕生し、隆盛した。フランスでの日本に関する情報は、キリシタン禁制下にあつては、長崎オランダ商館を通じての間接的なものであつたが、1858年に日仏修好通商条約が締結されて、フランスの日本学者が日本人と直接の交流を持てるようになる¹⁾と、1873年に第一回国際東洋学会議が開催されるなど、日本についての本格的な研究が深まってきた。

外国人による日本研究を歴史的に考察することによって、当時の外国人の日本認識実態を明らかにすることができるだけでなく、現在の日本人自身が当時の日本を知る手がかりを得ることができるものと考えられる。当時の外国人による日本研究では、日本人自身が記録として遺していない細かな事実など、客観的な視線が注がれているからである。また外国人による日本研究の歴史を跡付けることにより、現在の日本の外国人留学生教育に対してもなんらかの示唆を得ることができであろう。本稿は19世紀フランスの日本語文法書研究の第2報²⁾であり、19世紀フランスの日本研究が、それ以前の時代の日本研究からどのように進展していったのかを、おもに日本語文法書を手がかり

にして考察しようとするものである。

本稿で扱うのは、J.Rodriguez³⁾が1620年にマカオで出版した、“*Arte Breve da Lingoa Iapoa*”のM.C.LandresseとA.Rémusatによる1825年フランス語翻訳版“*Elémens de la Grammaire Japonaise*” (Librairie Orientale de Dondey Dupré), およびL.Rosny⁴⁾が著した1897年の“*Eléments de la Grammaire Japonaise*” (Maisonneuve Librairie Éditeur) (第2版)の2冊である。ロドリゲスの著作としては“*Arte da Lingoa de Iapam*”⁵⁾ (『日本語大文典』1604年)が著名であり日本語訳もされているが、1620年のものは仏訳されたため、当時の東洋学者たちにはむしろよく利用された。一方、ロニの著作は、彼がパリ東洋語学校に日本語講座を開設して以来、フランスの日本語学者たちの重要な学習書となっていた。またこれら2冊は、日仏修好通商条約の締結から前後にそれぞれ約35～40年隔てた時期のものであり、開国前と開国後のフランスにおける日本語研究実態の比較を試みることができる。本稿ではこれら文法書のなかに、現代の外国人に対する日本語教育の示唆を模索してみたい。

II. ロニの日本関係著作

日本が鎖国を解いて後、日本語の運用の仕方

ついて日本人から直接に指導を受け、また各種文法書の執筆にあたって日本人の監修を得られるようになったことは、日本学者や日本語学習者にとって大きな福音であった。日本人との直接接触が、日本研究者にもたらす効果について、ロニは次のように述べる。

日本語の様々な文体を特色づけている、多くの活用変化の精緻な方法に、われわれ日本学者たちが精通するためには、将軍の使節の来欧を待たねばならなかった。この点私には、これまでの日本語学習書のなかでなござりにされてきた、通俗的な慣用表現と敬語で使われる助動詞について尋ねるだけでも充分だった。これまでの学習書では、簡単な言及すらなされていなかったのである⁷⁾(邦訳および括弧内引用者、以下同様)。

ロニがおもに接触を持ったのは、1862年の竹内保徳ら、第二回幕府遣欧使節団一行である。この時ロニは福沢諭吉らと積極的に交流を持ち、ロニは日本語で福沢は英語で会話した。さらにロニは、1867年に、将軍慶喜の名代としてパリ万国博覧会に列席した徳川昭武一行の随行員栗本鋤雲とも盛んに交流をもった。また日本の書籍を収集して、体系的に日本と日本語についての研究を行っていた。また福沢らとは帰日後も盛んに書簡のやりとりをしている。さらに1870年代に入ると、東洋語学校に日本人講師を招いている。西堀 昭氏の調査によれば1871年から72年まで留学生栗本貞次郎が、1873年から74年まで今村和郎が、それぞれ東洋語学校で日本語を教えており、さらに1880年代においても何人かの日本人講師の名前が確認されている。

ロニは、東洋語学校において1865年からは火曜日と土曜日の週二回、1872年から1886年までは月曜日、火曜日、水曜日、の週三回日本語の授業を担当しており、授業のなかで自らが著した日本語文法書を使用した。こうして東洋語学校での日本語の授業が開始され、さらに日本人との交流が深まると、ロニは、とくに1870年代において、精神的に日本と日本語に関する書籍を著した。

ロニは当時、パリのメジエール (Mézières) 通りにあったメゾンヌーヴ (Maisonneuve) 社から日本語文法書をだしていた。1897年のメゾンヌーヴ社の出版目録には、ロニの著作として、次のものが掲載されている。

1. Manuel de la lecture japonaise à l'usage des voyageurs et des personnes qui veulent

s'occuper de l'étude du japonais.1859.

2. Recueil de textes japonais à l'usage des personnes qui suivent le cours de japonais professé à l'Ecole des langues orientales.1863.
3. Yo-san-sin-sets.Traité de l'éducation des vers à soie au Japon par Sirakawa de Sandai (Osyau). traduits pour la première fois du japonais, publié par ordre du Ministre de l'Agriculture. 1868.
4. Yo-san-sin-sets.Traité de l'éducation des vers à soie au Japon par Sirakawa de Sandai (Osyau). traduits pour la première fois du japonais, publié par ordre du Ministre de l'Agriculture (contenant un guide de l'acheteur de graines japonaises).Deuxième édition revue, corrigée et augmentée de 12 pl.1869.
5. Thèmes faciles et gradués pour l'étude de la langue japonaise accompagnées d'un vocabulaire français-japonais.1869.
6. Si-ka-zen-yo Anthologie japonaise; poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon. traduites en français de et publiées avec le texte original, précédées d'une préface de Ed.Laboulaye.1870.
7. Le même ouvrage. Texte japonais seul, accompagné d'un vocabulaire.1871.
8. Traité de l'éducation des vers à soie. Quatrième édition abrégée.1871.
9. Botanique de Nippon.Aperçu de quelques ouvrages japonais relatifs à l'étude des plantes. accompagnés de notices; traduits pour la première fois sur les textes originaux. 1873.
10. Textes faciles et gradués en langue japonaise. accompagnées d'un vocabulaire japonais-français de tous les mots renfermés dans les exercices.1873.
11. Manuel du style épistolaire et du style diplomatique.1874.
12. Tai-Kauki.Histoire populaire de Taïkau-sama. traduits du japonais.1875.
13. Extraits des historiens du Japon.1874-76.
14. Zitu-go-kyau.Do-zi-kyau.L'enseignement de

- la vérité, ouvrage du philosophe Kôbaudaisi, et l'enseignement de la jeunesse.
Publiés avec une transcription européenne du texte original et traduits pour la première fois du japonais. 1876.
15. La religion des Japonaise. Quelques renseignements sur le sintaïsme. 1881.
16. Questions d'archéologie Japonaise. I. Les sources les plus anciennes de l'histoire du Japon. II. L'écriture sacrée et les inscriptions de l'antiquité japonaise. 1882.
17. Guide de la conversation japonaise. précédé d'une introduction sur la prononciation eu usage à yedo 3e édition. 1883.
18. Introduction au cours de Japonaise. Première notions de la langue japonaise parlée et écrite, 3e édition. 1884.
19. Les religions de l'Extrême-Orient. Leçon d'ouverture faite à l'École pratique des Hautes-Etudes. 1886.
20. Versions faciles et graduées en langue japonaise vulgaire. accompagnées d'un vocabulaire japonaise-français de tous les mots renfermés dans le recueil, 2e édition. 1892.
21. Thèmes faciles pour l'étude de la langue japonaise. accompagnés de deux vocabulaire français-japonaise et publiés à l'usage des élèves de l'École spéciale des langues orientales, 2e édition. 1892.

Ⅲ. ロニによる先行文法書の批判

ロドリゲスは、日本語の学習方法について次のような見解を持っていた。

学習すべき書物としては、文語の文体でかつその優雅な文体の故に日本人の間で高く評価されている古代の古典作家のものでなければならない。(中略) 従って、学習する書物として、我々の書物を日本語に翻訳したものは、たとえそれが文語であっても、絶対に用いてはならない。何故なら、それらの書物においては、日本語の文が我々の考えに應じるために不正確に言いかえられているからである。(中略) ここでは単に聞いてわかるための日本語、或いは告解を行なうための日本語の習得を目的とする者については扱わない。何故なら、そのような者はそれなりに学習すればよいので彼等にとっては、

教師が色々な材料から選び集め、或いは日常生活が教える会話体の言い方を学習するだけで充分だからである。我々が問題とするのは、日本語で説教し、文章を綴り、異教徒の間においてデウス(神)の法¹⁰⁾についての教師となるべき者についてである。

宣教師たちの日本語学習は、日本に布教するというきわめて現実的な動機を持つものであった。宣教師達は一般民衆の中に入ってキリスト教の教義を説論し、信仰に導かねばならず、このため彼らの日本語学習法もそうした目的に対応するものであった。ロドリゲスはそれを、日常会話の実用性にポイントを置き過ぎたものであると批判し、日本語を学ぶためには古典から入ることが肝要だとするのである。

一方ロニは、1856年の“*Introduction à l'étude de la langue japonaise*”の中で、ロドリゲスの影響を受けたことを自ら表明している。このことはロニ自身の文法書の題名がロドリゲスの仏訳版のそれとほぼ同一であることや、ロドリゲスと同様に人称代名詞を6つの格に分類して解説していることなどにも認められる。しかしながらロニは、“*Éléments de la Grammaire Japonaise*”のなかで宣教師による文法書を次のように批判する。

彼ら(宣教師たち)は、現地の文字を取り扱おうとはせず、漢字(の複雑さ)を悪魔の所業とみなした。そして日本語の単語をラテン文字に置き換えるだけにとどまった。もし、こうした文法書が話し言葉の情報を伝えるだけのものだったならば、それは欠点ではなくむしろ長所となったであろう。というのは、文字は日本語の二次的な用法だからである。人は会話においては音声を使うのであり、決して文字を使うのではないからである。そして会話のスタイルだけしか学ぼうとしない入門者は、学習の初期の段階で、膨大な漢字古文書を前にしながら、それを後回しにすることができないのである。不幸なことにあらゆる種類の文法書においてそれはとくに日本語のものについて顕著なのが、一多くの誤解がみられる。それは私たちに通俗的な言葉を理解させることもできないし、まして書き言葉を理解させることもできないのである。¹¹⁾

ロニはまた、1863年の東洋語学校(École des langues orientales)日本語講座開講講演のなかでも、先行文法書を批判する。森川 甫氏の邦訳に探ってみよう。

(前略) フランシスコ・ザビエルの後継者たち

は、実際、幾冊かの辞書や語彙集をよく出版しましたが、恐らく宣教師達には十分であったこれらの書物は、ヨーロッパの東洋学者の必要には何ら応えておりませんでした。一方では、これらの著作にはとくに原住民の使用のために書かれていたからであり、他方では、原語抜きで印刷され、また、大抵の場合、欠陥のある方法で構成されていたからであります。

(中略)

言語を転写するためにラテン文字を用いていることに關しては、日本人が音ではなく、事物とか觀念の性質を呼び起こす記号を用いていることを考えるならば、それがいかに不十分であるかが、容易に分かります。異綴同音語が現われる場合、それは数多くありますが、ラテン文字に転写された日本語の本文はまったく理解できません。

(中略) この熱心な宣教師たちの著作は書物の高い知的程度に対しては非常に凡庸な手段でしかなかったのが、今世紀初頭、日本語のテキストを少しでも翻訳するとき、東洋学者は誰もこれに頼ることができなかつたのであります。その上、日本がヨーロッパ人に対して鎖国していたことが、スペインやポルトガルのイエズス会士たちのこれらの著作を極めて珍しいものにし、ヨーロッパには数冊だけしか到り着きませんでした。しかもヨーロッパでは利用する能力を持つ者の手には入らず、これらの著作は法外な値段で入手された後、富裕な愛好家たちに売られ、彼らの書庫のほとんど近付けない戸棚に豪華に飾られておりました。

「事物とか觀念の性質を呼び起こす記号」とは、表意文字としての漢字のことである。漢字を含む日本語を、単純にラテン文字に置き換えることへの批判は、ロニが“*Éléments de la Grammaire Japonaise*”のなかで述べたことと一致する。アルファベットだけでは、同音異義語を同一に表してしまい日本語の理解を妨げることになるとするのである。ロニは、宣教師達の文法書に誤謬が多いと指摘するだけでなく、それらがヨーロッパでは希観本になってしまっていたと批判する。このようにロニは、宣教師達の日本語文法書を具体的に批判し、それが東洋学者たちの使用に耐えるものではないとする。

IV. 日本語の文体をめぐるロドリゲスとロニの見解

日本語の文体が単一でないことは、ロドリゲス

もロニもともに認めており、それを日本語固有のものとして特色付けている。まずロドリゲスは次のように述べる。

日本語は、中国語と同様に二つの文体を持っており、それらは固有のものである。そのひとつは書き言葉であり、もうひとつは話し言葉である。話し言葉に書き言葉を用い、また書き言葉に話し言葉を使うことは滑稽である。しかし、話し言葉はほとんどすべての人から聞かれる。文法の原理と品詞の一致(数・格・人称の一致)は、二者において根本的には同じなのである。二者の違いは、文の言い回し、単語の意味、動詞の時制と活用、非常に多数の助詞の使用におけるものである。¹³⁾

一方ロニはロドリゲスの見解に、さらに書簡で用いられる文体を示し、次のように述べる。

通俗語、書き言葉、書簡体の名前のもとに示される3つの文体は、「これら3つの文体は、それぞれ3つの国語を構成する」といみじくも表現されるように、単に使用される単語の視点からだけでなく、文法の視点からも非常に異なった印象を与える。¹⁴⁾

ロニは、ロドリゲスの口語体、文語体両者において文法はほぼ同じであるという見解に対して、文法自体も文体によって違うのだと主張する。これに続けてロニは、それぞれの文体で3つの文例を示す。これら3文例は同一内容のものであるが、ところどころに語の誤謬が認められることや、その文章からみて、他からの引用ではなくロニ自身の作によるものと考えられる。

Langue parlée (口語)

ニツホンニタビライタシマスコトハカンエウデゴザイマス。タウジハジャウキシヤナラビニジヨウキセンノハツメカラワツカゴジフニチデニツホントフランストノワウライガデキマス。ニホンゴラシルヒトニハカンエウデサウシテオモシロウゴザイマス。スコシモノソクニノコトハラシラヌモノニハニホンジントツキアフコトガデキマセヌエニカレラトリヒキガデキマセヌバカリデナクヨクコクナイナラビニソクニノヤウスラシルコトガデキマセヌ。

Langue écrite (文語)

日本国ヲ経曆スルコトハ尤切要也 仏国ヨリ日本ニ到ルニ蒸気車及火輪船ノ發明ヨリ僅ニ五日ヲ費ス可シ 若旅客能日本語ヲ解タラン者ニハ緊要ニシテ且愉快ナラン 此ニ友マシテ其語ヲ不解者ハ国人ト交リ不能故ニ諸事ヲ共ニ為シ不能而已ナラズ其国内及其風俗ヲ遍ク知ルコ

ト甚ダ難シ

Style épistolaire (書簡体)

拝啓 然者日本國ノ遊歴ハ至極切要ノ事ト奉存候 蒸氣船車ノ發明有之候以來ハ仏國ト日本ノ間僅カ五十日ニシテ往復可仕候 旅客若其國語ニ通ゼズマ候ハ益殊ニ多ク且ツ愉快ニ候ハン 然シ國語ヲ解セザル者ハ國人ト交ハル事能ハズ候故ニ互ニ事ヲ行フノミナラズ其国内各地ノ風習ヲモ研究難相成奉存候¹⁵⁾

ロニはこれら3文例のなかで、例えば日本国内の旅行をそれぞれ「タビライタシマスコト」・「経曆スルコト」・「遊歴」と3様の単語で表し、また文末表現に「アス・マス」体・常体・「候」体を用いて、その相違を浮き彫りにしている。このような文例はロドリゲスのものには認められない。

漢字を用いて、日本における実際の言語生活をシミュレートするこの文例からは、ロニが実用性を高い文法書を作成しようとしていることがうかがえる。

V. ロドリゲスとロニにおける動詞の活用と比較

それではロドリゲスとロニとでは、その文法書の具体的解説にどのような差異が見られるであろうか。日本語人称代名詞とそれに付随する格助詞の解説については、別拙稿¹⁶⁾ですでに比較を試みたことがあるので、ここでは動詞の活用についての記述を比較してみたい。ロドリゲスの示した日本語の動詞(求める)の活用を表1に、またロニの示した動詞(見る)の活用を表2にまとめた。

これによると、ロドリゲスはPrésent (現在)、

〈表1〉ロドリゲスが示した動詞の活用 「求める」の場合

	présent 現在	imparfait 半過去	parfait 完了	plus-que -parfait 大過去	futur simple 単純未来	futur parfait 未来完了
indicatif 直説法	Motomourou	Motomourou Motometa	Motometa Motometearou	Motometa Motomette atta	Motomeô Motomeôzou Motomeôzou -rou	Mtomete arôzou Faya motomeô
impératif 命令法	Motomeyo Motomei Motomesai Motomeito Motomeyoto Motomesaito				Motomeo Motomeozou	
optatif 希求法	Motomeyokasi Motomeyogana	Motomeomonowo Motometaraba -yokaro monowo Motometearou -monowo Motometaroniwa -yokaro monowo		Motomeômonowo Motometearou -monowo Motometearaba -yokaro monowo	Motomeyokasi Motomeygana	Motometearekasi
conjunctif 接続法	Motomoureba Motomourouni Motomourou -tokoroni		Motometareba Motometani Motometa -tokoroni	Motometareba Motomete -attareba Motomete	Motomouzôreba Motomeo Motometaro toki Motomeozourou	

		Motometeareba	-attani Motomete ou tokoroni	kara notsi
	Motomouredomo Motometaredomo	Motometaredomo Motometeattaredomo Motometearozouredomo Motomeôzouredomo		Motomeôzourouredomo
condition -nel 条件法	Motomeba Motomourouanaraba Motomourouoitewa	Motometaraba Motometanaraba Motometaniwoitewa Motometearaba Motometeattaraba	Motomeba Motomourou -naraba Motomeô -naraba	Motometearaba
concessif 譲歩	Motomoureatote Motomouroutomo Motomourouto -yôutomo Motomeyo Motomei Motomemoseyo Motomemoseyokasi	Motometarebatote Motometaritomo Motomeômadeyo Motometaniseyo Motomeôzoureatote Motomeôtomoto Motomeôniseyo Motomeômade Motometemo Motometaritomo		
potentiel 可能・蓋然の法	Motomeô Motomeôzou Motomeôzourou Motomourouro Motomeôzourouka	Motomeôzou Motomemosôzou Motomouroukotomo -arouzou Motometzourô	Motomeôzou Motomemosôzou Motomouroukotomo -arouzou Motomeôzourô	
infinitif 不定法	Motomouroukoto Motomourouto	Motometakoto Motometeattakoto Motometeattato	Motomeôkoto Motomeôzouroukoto Motomeôto Motomeôzouto Motomeôzourouto	
participe 分詞	mono Motomourou fitowa wa Motomete	mono Motometata fitowa wa Motomete	mono Motomeô Motomeôzourou } wa Motomeôtosouroumono Motomeôsourouni Motomeôtosourou -tokoroni Motomeôni Motomeôzourouni	

〈表2〉ロニが示した動詞の活用 「見る」の場合

	présent 現在形		passé 過去形		futur 未来形	
indicatif 直説法	Watakûsi-wa Anatawa Ano-hito-wa Watakûsi-domowa Anata-gata-wa Ano-hito-tati-wa	mi-masû mi-masû mi-masû mi-masû mi-masû mi-masû	Watakûsi-wa Anatawa Ano-hito-wa Watakûsi-domowa Anata-gata-wa Ano-hito-tati-wa	mi-masita mi-masita mi-masita mi-masita mi-masita mi-masita	Watakûsi-wa Anatawa Ano-hito-wa Watakûsi-domowa Anata-gata-wa Ano-hito-tati-wa	mi-masyau mi-masyau mi-masyau mi-masyau mi-masyau mi-masyau
(以下各綴法において6つの人称表示があるが、省略)						
impératif 命令法	mi-mase omi-nasai					
condition -nel 条件法	mi-masu-naraba		mi-masita-naraba		mi-masyau-naraba	
concessif 譲歩	mi-masû-to-iye-domo		mi-masita-to-iye-domo		mi-masyau-to-iye-domo	
infinitif 不定法	mi-masû-koto		mi-masita-koto		mi-ma-syau-koto	
gérondif 動名詞	mi-masite					
participe 分詞	mi-masû		mi-masita		mi-masyau	

「見ぬ」の場合

indicatif 直説法	mi-masenû	mi-masenanda	mi-masû-mai
impératif 命令法	o-minasaru-na		
condition -nel 条件法	mi-masenû-naraba	mi-masenanda-naraba	mi-masû-mai-naraba
concessif 譲歩	mi-masenû-to-iye-domo	mi-masenanda-to-iye-domo	mi-masû-mai-to-iye-domo
infinitif 不定法	mi-masenû-koto	mi-masenanda-koto	mi-masû-mai-koto
gérondif 動名詞	mi-masenande		
participe 分詞	mi-masenû	mi-masenanda	mi-masû-mai

imparfait (半過去), parfait (完了), plus-que-parfait (大過去), futur simple (単純未来), futur parfait (未来完了) の6の時制を示しているのに対し、ロニは présent (現在), passé (過去), futur (未来), と3の時制のみを示している。ロドリゲスが行なったように、日本語の動詞を6時制に活用させて陳述することは不可能ではない。またフランス語などの言語を母国語とする学習者には、ラテン語系の時制を使っての解説が理解しやすいということもあろう。しかし、ロドリゲスの示す時制では、活用が非常に煩雑になっており、学習者の混乱の恐れなしとしない。さらに提示されている活用は文語調であり、文法上はその活用形を作ることは可能であろうが実際の表現では使用されない活用形も示されている。一方、ロニの活用では、3時制の分詞としてそれぞれ、mi-masus, mi-masita, mi-masyau のみが使われている。このように時制が3種類に絞ってあるために簡潔であり、日本語運用の実際に対応しているといえよう。

ロドリゲスも、ロニも、動詞を直説法・命令法・条件法・譲歩などの各敘法(mode)に分類して解説している。このように動詞活用を敘法によって分類するやり方は、フランス語の文法体系を学んだ者には理解が容易であったと考えられる。またこうした解説は、動詞の語尾による単一の活用ではなく、助動詞や助詞を含めた複合語としての活用を示すものであるため、学習者がフレーズとして習得しやすい。ロドリゲスの解説では希求法(optatif), 接続法(conjonctif), 可能・蓋然的敘法(potentiel) が他の敘法とともに示されているが、ロニの解説では、通常の口語表現でほとんど使われることのないためかこれらは示されていない。さらにロニの解説では、条件法に(naraba)が、譲歩に(to-iyé-domo) がそれぞれの法を示す文節のユニットとして提示されており、各時制分詞にこれらを組合せて接続すれば、学習者の表現したい活用形が作れるように工夫されている。なおロニの示した(to-iyé-domo) という譲歩の文節のユニットや、否定の助動詞(ná)「ぬ」は、現在の口語表現とは異なる。これらが当時の日本人の一般的な言い方であったかどうかについてはなお検討を要す。しかし、これらがロニの通俗的(vulgaire)と認識した言い回しのなかに記録されていることは、19世紀終わりの日本人の日本語運用形態を知るうえで興味深いものであるといえよう。

VI. 結語

ロドリゲスの文法書は、日本語をラテン系言語の文法体系にそのままあてはめるかたちで説明し、また古典的文語文の学習から始めるものであった。その発想は、ヨーロッパにおける古典語学習の伝統とも似通っていて興味深い。おそらくロドリゲスは、自らの学びとった日本語を、そのまま2冊の文法書に集約的に表出したものと考えられる。しかしそれは、希観本収集家の書庫で眠り、広く一般に流布することはなかった。他方、ロニの文法書には、多少の誤謬はあるものの、動詞の活用を文節ユニットでまとめるなどの工夫が懲らされていた。また先述のように、ロニは日本人との直接接触を背景に多くの日本関係書を著しており、なおそれが試行的な段階であったにせよ、それぞれの解説書を、様々な日本語能力レベルの学習者に提供することが可能だった。ここにはロニ自身が日本語文法体系をよく理解し、それを教材として再編成していることが窺える。異文化受容のアスペクトを、「発見」、「採用」、「同化」、「創造」の4つのシークエンスで考えてみるならば、ロドリゲスの文法書は日本語「発見」の段階にあたり、またロニのそれは日本語「採用」ないしは「同化」の段階のものであったと考えられる。

日本語文法の解説を敘法で分類して行なう方法は、先述のように、日本語表現を一定のフレーズとして習得できるというメリットがあり、現代の日本語教育においても、とくにラテン系言語既習者に対しては有効な方法であるかもしれない。筆者自身の教育活動における、今後の研究課題としたい。

註

- 1) 第一回東洋学会議については、拙稿「1873年第一回パリ東洋学会議における日本研究—マディエ・ド・モンジョの発表を中心として—」(広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』第13巻, 1987年)参照。
- 2) 拙稿「19世紀フランスにおける日本語研究に関する史的考察(その1)—一人称代名詞を中心にして—」(広島大学教育学部日本語教育学科・留学生日本語教育研究室編『留学生日本語教育に関する理論的・実践的研究』1989年)。
- 3) ジョアン・ロドリゲス(João Rodriguez)(1561~1633)ポルトガルのイエズス会宣教師でコレジオの教師となった。長崎在任中の

1604年に、“*Arte da Lingoa Japam*”（『日本大文典』）を著し、後にこれを簡約化して1620年の文法書を著した。

- 4) レオン・ド・ロニ (Léon de Rosny) (1837～1914) バリの東洋語学校 (Institut National des Langues et Civilisations Orientales) で中国語を学んだのちに、1863年から同校に日本語講座を開設した。また1869年には教授に昇格し、1907年まで同校に勤務した。また1873年にはパリで第一回国際東洋学会議を主催した。
- 5) 筆者は、クリスチャン・ポラック (Christian Polak) 氏により貸与させていただいた。
- 6) 土井忠生訳『日本大文典』三省堂、1955年。
- 7) Léon de Rosny, “*Éléments de la Grammaire Japonaise*”, Maisonneuve Librari Éditeur, 1897, p. VII.
- 8) 西堀 昭「フランスにおける日本仏学資料 3. レオン・ドゥ・ロニと東洋語学校における時間表」(『仏蘭西学研究』第7号, 1976年)。
- 9) 同上書。
- 10) 熊沢精次「欧米人の日本文学観」(慶応義塾大学国際センター『日本語と日本語教育』第9号, 1980年), 2～3頁。
- 11) 前掲書7), p. V-VI.
- 12) 森川 甫「ロニの東洋語学校日本語講座開講講演 (1863) 年」(『関西学院大学社会学部紀要』47, 1983年)。
- 13) M.C.Landresse, A.Rémusat, “*Éléments de la Grammaire Japonaise, par J.Rodriguez*”, Librairie Orientale de Dondey Dupré, 1825, p.2.
- 14) 前掲書7), p.179.
- 15) 前掲書7), p.180.
- 16) 前掲拙稿2)。